

特別寄稿

渡辺洪基 もう一つのパイオニア

学校法人 工学院大学 理事長

大橋 秀雄 氏

武生立葵会の記念すべき二十年周年の節目に寄稿のお誘いを受け、光栄に存じます。貴会はまさに、郷土の過去を現在に生かす活動を続けてこられました。過去を調べたり語ったりするとき、私は二つの過去があると感じています。一つは歴史としての過去で、これは千年前も三百年前も基本的に同じで、残された記録を通してのみ感知される過去といえます。もう一つが昔話としての過去で、自分が体験したか、あるいは体験した人から聞いた覚えがある生きた記憶の中の過去といえます。



渡辺洪基 (明治 32 年)

くらい遡るのでしょうか。これは、基本的にその人の年齢により、十才の子供には、十年前は記憶にもない大昔になりますが、私にはついこの間のことになります。これだけですと、昔話は生まれて年までということになります。親や先生から聞いた話を加えると、生きた記憶としての昔は、もっと過去に遡ります。

私は、タイムミラー法という自己流の理論から、自分の年齢の二倍までは、昔話の範疇に入ると考えるようになりまし。鏡の中に見える自分の像すなわち鏡像は、鏡から離れるにしたがって、どんどん遠ざかって小さく見えます。鏡像は、いつも鏡と自分との距離の二倍離れたところに立っています。この原理を時間に応用し、生まれた年にタイムミラーを立てると、年をとるにしたがって、そこに映る鏡像は時間を逆行して過去に遡ってゆきます。年齢の二倍遡った昔に、自分の鏡像がいます。正直言います。私は一九三一年生まれですから、二〇〇九年時点の私の鏡像は一八五三年をさまよっています。ペリーが浦賀に入

港し、日本中が黒船騒動で沸き立った年です。これからお話しする渡辺洪基は、当時六才、藩塾「立教館」で学ぼうと志した頃でした。

私は、タイムミラーで遡ることができる時代は、自分の体験の延長線上にあると思っています。私にとつて明治以降の日本現代史は、歴史書の中の過去でなく、昔話として感じられるようになりまし。渡辺洪基の逝去は私が生まれる三十年前に遡りますが、私は彼を歴史上の一人物ではなく、いまに繋がる強い絆として感じています。工学院大学の前身、工手学校の設立者渡辺洪基の胸像は、いまなお行き交う学生たちに毎日語りかけながら、その志を伝えていきます。決して歴史書の中の存在ではありません。

武生が誇る偉人、渡辺洪基については、伝記などを通じて多くが語られています。官から始まり、学や産の分野で果たした洪基の業績は、あまりにも多岐多彩で、現代人の理解の枠をはみ出しています。日本建築学会の会議室に並んでいる歴代会長の写真の中に、辰野金吾に先だつて二代目会長を務めた洪基の写真を見付けたときは、思わず「建築もですか」と唸らざるをえません。洪基の業績は、明治を代表する経済人として誰でも知っている洪沢栄一と比肩するものがあります。しかし何故か、知名度には格段の違いがある

立者渡辺洪基を入学してくる生徒や学生に紹介するとき、そのマルチ振りを「国造りの達人」という表現で締め括っています。

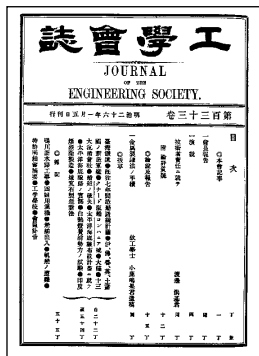
洪基が国造りでパイオニア役を果たした例は、いくつも挙げることもできます。岩倉具視遣外使節団に随員として加わったことは、外務官僚として対外交渉のパイオニアだったでしょう。また在外公館駐在の特命全権公使のパイオニアでもありました。学習院や帝国大学など国立学校統治のパイオニア、工手学校や大倉商業学校（東京経済大学）など私立学校創設のパイオニア、鉄道、銀行などの企業設立のパイオニア、帝国議會議員として国政代議士のパイオニア、まだまだたくさんあります。

この小文の主題である「もう一つのパイオニア」は、いままで余り認識されていなかった洪基の先進的な思想に関わるものです。

今年創立百三十周年を迎える日本工学会は、明治十一年に設立された工学会に発します。その年、わが国初の工科系大学、工部大学校（現在の東大工学部）が二十三人の一期生を世に送り出しました。工部大学校出の工学士たちが、その後の産業発展を支える技師たちの先駆けとなりましたが、彼らの切磋琢磨と親睦の場として工学会が設立されました。その後専門別の学会が次々に誕生するのを承けて、大正十一年には、それまでの個人会員組織から工学系の学会が加盟

する連合体に改組され、いまの日本工学会に受け継がれています。この十年間で、工学系の大学で行われる教育、すなわち工学教育に大きな変化がありました。端的にいえば、それまでなかった技術者倫理の講義が広く導入されたことです。以前は、工学部は工学という学問を教えるところとされていましたが、グローバル化が進展するにつれてその異端性が目立つてきたからです。国際的には、工学教育の目的は、技術者として働くに必要な知識・能力を養うことで、学問としての工学はそのために必要な基礎知識にほかなりません。人の命を預かる医者には、医師倫理が必要なことは誰にも分かります。人工物に取り囲まれた現代社会では、われわれは人工物の信頼性・安全性に命を委ねています。それを考案して作り上げるのは技術者ですから、人の命を守るうえで、医者も技術者も同等です。これで技術者倫理教育の必要性が分かっただけではありません。最近大きな書店に行く、技術者倫理に関する本がずらりと並んでいます。すでに一九一〇年代から、アメリカを中心に Engineering Ethics が工学系学会の編領に取り入れられ始めたので、この技術者倫理という思想自身が、お決まりの欧米輸入かと考えられていました。

ここで、渡辺洪基の登場となります。洪基は、明治二十五年（一八九二年）十一月に開催された工学会の通常会で、「技術者責任に就て」と題して講演しています。その速記録が工学会誌133巻（明治二十六年一月号）に収録されていますが、岩波書店の日本近代思想大系14巻「科学と技術」（一九八六年）の中にも転載されています。しかしその内容が技術者倫理と関連づけて意識され始めたのは最近のことです。三上喜貴氏の指摘がきっかけとなりました（注1）。講演の私流の要約は以下の通りです。



工学会誌 第133巻(明治26年) 渡辺洪基の演説掲載

政治家には政治家の責任、医者には医者の責任というように、一個独立の働きをするものは、その言動、挙動に対して責任がある。工学士（いまの大学卒の技術者）は、たいへん重要な役割を果たしている、その責任も同様に重い。何に対する責任かというところ、それは自分の名誉に対する責任であり、それが信用の源である。「学医匙廻らず」の格言のごとく、知識だけでは役に立たない。工学士は、科学の基礎から技術を理解して、実際への応用力を備えるべきだ。

工学士が設計・計画した事業案が、素人の議員諸君の口出しによってひっくり返されることがしばしば起こる。これは、工学士の信用が足りないせいだ。仕事に責任を負い、信用を高めるためには、

- ▽自分がやるべき職務は、どこまでも果たす
- ▽自分の力ではおぼつかないことは、引き受けない
- ▽議会や公衆に、責任の所在を明確にして、信用が得られるまで説明する
- ▽一言でまとめると、「技術者は自立して働くプロフェッショナル（専門職）であるから、その仕事に責任を負い、社会の信用を高めなければならない」これは、今日という技術者倫理と基本的に同じ思想です。

洪基が、欧米における Engineering Ethics の導入に先駆けて、百二十年前にこの考えを持っていたことは驚きであり、まさに世界に誇れるパイオニアといえます。

洪基の思想は、工学系の学協会に徐々に浸透し、土木学会の「土木技術者の信条および実践要綱」（一九三八年制定）を端緒として、いまでは主要な学協会は独自の倫理規定・綱領を掲げるようになってきました。

洪基のもう一つの偉業をご理解いただけたでしょうか。洪基の演説を熟読すると、同じ責任でも、誰に対する責任かの意識は、時代背景に大きく支配されると痛感します。



（写真・同年十二月一日 京町二丁目 渡辺洪基生誕の地にて 本会員撮影）

注) 1 三上喜貴、技術者倫理と学協会、フルードパワーシステム、37巻2号、二〇〇六年八月、24、29頁

大橋秀雄氏 略歴紹介
一九三二年東京生まれ。新潟県立村松高校、東京大学工学部機械工学科卒。東京大学で教育・研究三十三年、同名誉教授、工学院大学で教育・運営十一年、同名誉教授、元学長。二〇〇三年から日本技術者教育認定機構などの会長を歴任。藍綬褒章、紫綬褒章。

二〇〇二年、武生で開催された「渡辺洪基没後百年記念事業」（会報第三十号）で、「渡辺洪基先生の目指したものと題した基調講演をいただきました。」

倫理の原典である論語の言葉借りれば、洪基の時代の第一原理は「忠」でした。私は「仁」を第一原理にしています。皆様方はいかがですか？（以上）